

地域再生計画

1. 地域再生計画の名称

米原エコミュージアムプログラム

2. 地域再生計画の作成主体の名称

滋賀県及び米原市

3. 地域再生計画の区域

米原市の全域

4. 地域再生計画の目標

〔計画の背景〕

米原市は滋賀県東北部地域に位置し、総面積は 223.1km² である。日本百名山の一つ伊吹山を東に擁し、総面積の約 7 割を占める森林に蓄えられた水は、清流天野川や姉川となって地域を流れ、母なる琵琶湖に注いでいる。この伊吹山から琵琶湖へと注ぐ水系は、貴重な動植物の生息地となり、当地域にとってかけがえのない自然環境をもたらしている。

伊吹山は、草花の種類が豊富で我が国でも有数の薬草の宝庫として知られているほか、天野川の源氏ボタル（昭和 27 年に国の特別天然記念物に指定）、姉川などの清流と鮎、三島池のマガモ、醒井のハリヨと梅花藻、オオムラサキや里山など、当地域は豊かな自然の恵みにあふれた地域として傑出している。

当地域はまた、東海道新幹線、東海道本線、北陸本線、近江鉄道の鉄道網ならびに名神高速道路、北陸自動車道の高速道路網があり、京阪神、中京圏、北陸圏を結ぶ交通の結節点として特徴を活かした交流のまちづくりを進めている。

さらに古くから交通の要衝であったことから、街道を行き交う人々とともに、数々の歴史の舞台となり、伊吹山と醒井の居醒いさめの水を舞台としたヤマトタケル伝説をはじめ、古代豪族の息長氏おきな、バサラ大名として有名な京極道誉、戦国時代を代表する秀吉・三成の足跡、また中山道の柏原宿、醒井宿、番場宿の街並みなど、数多くの史跡・歴史文化が根付いた地域でもある。

現在、当地域の人口は 41,251 人（平成 12 年国調）で、近年微増傾向にあるものの、高齢化率は 21.6%（同）であり、まもなく 4 人に 1 人は高齢者となる時代を迎える情勢にある。

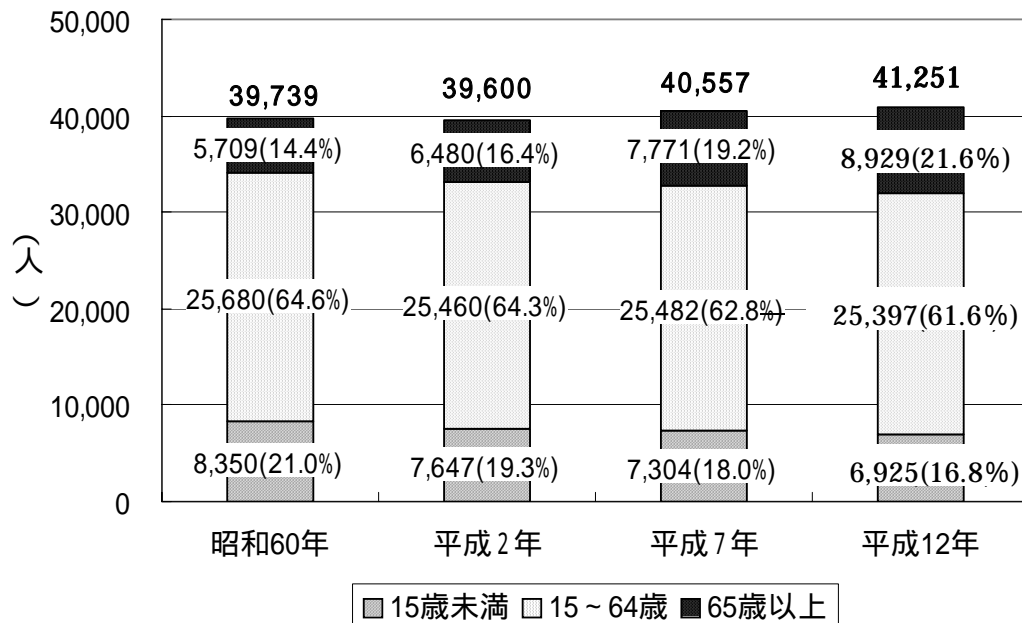


図 - 1 人口の推移

資料：国勢調査（総務省統計局）

こうした情勢にあって、上述したような豊かな自然環境・交通条件・歴史に恵まれた地域の特性を活かして、地域経済・社会の活性化を図っていくことが求められている。

米原市の基本理念（新まちづくり計画）にうたわれているように、交流人口の拡大、すなわち交流型産業の振興を図り、多くの出会いと交流を広げるまちづくりを進める必要がある。

とりわけ、都市との共生・対流を促進する中から、都市地域の人々を農山村である当地域の良き理解者（パートナー）として受け入れ、新しい知恵や活力を導入していくことが不可欠である。そして、恵まれた都市地域との交流・連携条件を活かして、若者の雇用創出・定住促進と高齢者の健康増進・生きがい対策などに効果的な方策を講じることが求められている。

現在の米原市は、平成 17 年 2 月に、山東町・伊吹町・米原町が合併し、さらに平成 17 年 10 月に近江町と合併してできた新しい市である。これらの旧町の共通点は、分権社会に備えた住民主体のまちづくりを積極的に推進してきたことである。

具体的には、以下のような各地区（自治会・字）を基礎単位としたまちづくり事業の推進にそれぞれが積極的に取り組んできた。

〔山東地区〕 美しいまちづくり 自治会別地域診断と美しいまちづくり条例の制定

〔伊吹地区〕 総合発展計画 地区計画 字別 10 年長期計画の策定

〔米原地区〕 まいはらまちづくりほっとプラン事業 地区別まちづくり計画

〔近江地区〕 夢のふくらむ元気な自治会活動 自治会別まちづくり活動

こうした取り組みは、地域住民が自らの手で地域を分析し、計画を策定することにより、住民自治の基礎づくりを進めるねらいがあった。

あわせて、環境保全、特産品加工、伝統文化の継承などに取り組む数多くの住民グループの育成、活動支援にも取り組んできた。

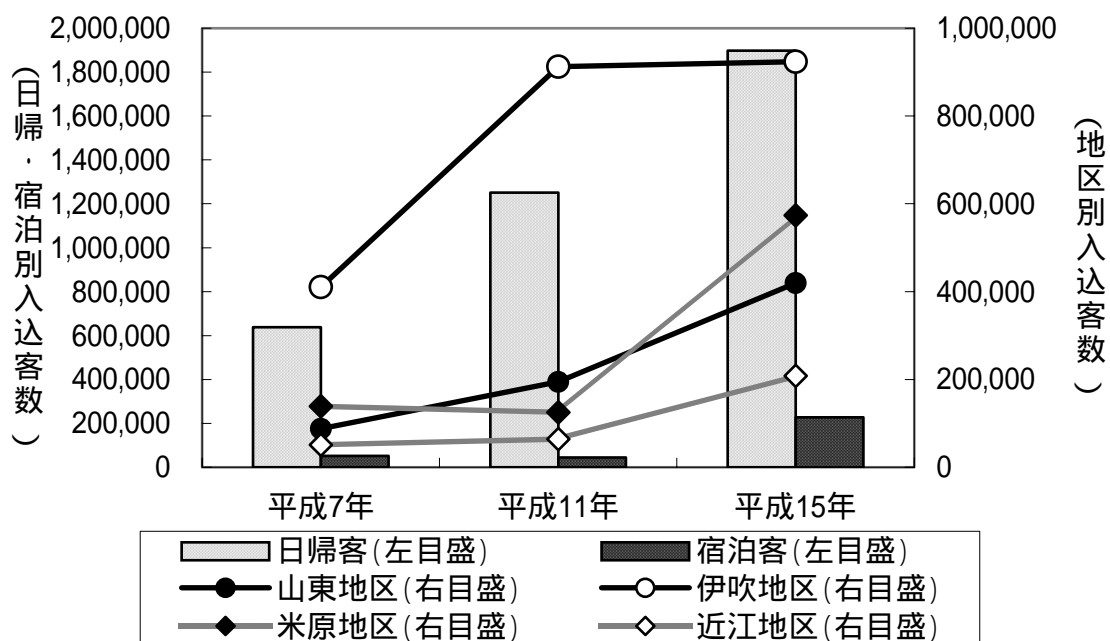
その結果、当地域には地域住民が主体的に関わる多くのイベント、まつりが活発に展開されるようになってきている。ホタルを愛する住民および約 3,000 人のボランティアにより運営されている「山東ホタルまつり」、盆梅愛好会の尽力により冬季の一大イベントとなった「鴨の里盆梅展」、中山道柏原宿の名物“伊吹もぐさ”にちなんだ住民の手づくりによるイベント「やいと祭」、30 以上の住民グループが参加して行われる「伊吹特産品フェア」、雪をまちづくりに活かそうと実行委員会が主催する「雪合戦奥伊吹バトル&かまくら祭」（日本雪合戦連盟公認の大会）、城跡を中心にしたまちづくりに取り組んでいる近江中世城跡保存団体連絡会主催の「近江中世山城琵琶湖一周狼煙駅伝」（第 8 回ふるさとイベント大賞 部門賞受賞）、日本武尊の命を救った伝説の湧水“居醒の清水”を源流とする地蔵川を舞台として行われる「醒井地蔵まつり」、里山保全活動を目的に設立された NPO“やまんばの会”が主催する「やまんばの森学園祭」、「参加してみんなで創る」を合い言葉に天野川の七夕伝説のまちにちなんだイベントが繰り広げられてきた「おうみ七夕夢まつり」などはその代表格であり、数多くの参加者・訪問客を集めるイベントとして定着してきている。

こうした経緯から、当地域の地域再生に向けて、「自然環境・伝統文化」と「人」の活用に焦点を当て、伊吹山から琵琶湖へ向けて広がる当地域全体をまるごと自然博物館とする「米原エコミュージアム」の実現を計画するものである。

なお、当地域では、観光施設の整備、情報の発信、地域住民の努力によるイベントの充実等により、観光入込客は近年著しい伸びを示している。こうした状況は、都市と農村の共生と対流を実現していく上での追い風ととらえている。

しかしながら、これら観光入込客の 89.3%は日帰り客が占め（平成 15 年観光入込客統計調査〔滋賀県〕）、今後に向けて、滞在客の割合を高める努力が大きな課題として残されている。

今回申請する「米原エコミュージアムプログラム」とは、当地域の宝物である豊かな自然環境・伝統文化と地域に暮らす活力ある人々の営みを組み合わせ、体験プログラムという観光メニュー、あるいは地域ブランドの特産品を産み出し、都市住民に提供していくものであり、これにより、交流人口の拡大を図り、地域経済の活性化と地域雇用の創出を目指すものである。



	平成7年		平成11年		平成15年		伸び率 (H15/H7-1)
日帰り客	637,200	92.5%	1,250,700	96.5%	1,898,300	89.3%	197.9%
宿泊客	51,500	7.5%	44,700	3.5%	226,600	10.7%	340.0%
山東地区	88,100	12.8%	194,300	15.0%	419,200	19.7%	375.8%
伊吹地区	410,300	59.6%	912,300	70.4%	923,500	43.5%	125.1%
米原地区	139,000	20.2%	124,800	9.6%	573,600	27.0%	312.7%
近江地区	51,300	7.4%	64,000	4.9%	208,600	9.8%	306.6%
合計	688,700	100.0%	1,295,400	100.0%	2,124,900	100.0%	208.5%

図 - 2 交流人口（観光入込客数）の推移（資料：観光入込客統計調査〔滋賀県商業観光振興課〕）

〔目 標〕

「米原エコミュージアム」では、関西圏・中京圏から約 1 時間 30 分で訪れることのできる交通条件、並びに当地域の人々の分権社会を前提とした内発的・自発的な自助努力・活力を結集しつつ、地域の個性を生かした新しい農山村の発展の道筋を開き、「自然きらめき、ひと・まち ときめく、交流のまち」の実現を目指す。

（目標 1） 豊かな自然環境の保全

目標とする指標	現状値 (平成 17 年)	目標値 (平成 21 年)
自然案内人の数 〔伊吹山で活動する観光ボランティアの人数〕	21 人	50 人

エコツーリズムなどを通じて、自然環境に対する正しい知識を普及する活動を展開していくことは、エコミュージアムの体験プログラムの重要な要素になると考えている。

例えば、ホテルの保護や伊吹山・里山の環境保全に取り組む住民がツアー客のボランティアガイド役になることが考えられる。こうした住民ボランティアにとっては、自分たちがこれまでの活動の中で得てきた知識を発表する場を確保できると同時に、環境保全への理解者を増やす効果が期待できる。

とりわけ、水資源の確保、食糧や木材などの環境材（エコマテリアル）の生産・供給の面では、農山村と都市地域が互いに連携を深め、緊密な関係を構築していくことが不可欠な時代を迎えている。

貴重な動植物が多数生息する豊かな自然は、当地域にとってかけがえのない宝物である。エコミュージアムの取り組みを通じて、都市住民と地元住民が相互理解を深め、環境保全に連携して取り組む関係を構築しながら、環境保全活動の活発化を図ることが第一の目標である。

（目標 2） 観光産業の振興

目標とする指標	現状値 (平成 17 年)	目標値 (平成 21 年)
観光ボランティア数 (伊吹山で活動する観光ボランティアを含む。)	46 人	100 人
観光入込客数 〔観光入込客統計調査（滋賀県）〕	225 万人 (平成 16 年)	330 万人

自然環境に限らず、伝統文化・生活文化といった、地域がもつ様々な素材に焦点を当てた体験プログラムを提供し、エコツーリズムを定着させていくことにより、ツーリズム客の増加が見込める。

単なる観光入込客、宿泊客の量的な増加のみならず、顧客の多様なニーズに応えようとする努力の結果として、既存の観光業者の意識改革、新たな観光産業への参入などが期待できる。こうした地域の観光産業全体の底上げを図り、雇用機会の拡大を図ることが第二の目標である。

(目標3) 農業の振興

目標とする指標	現状値 (平成17年)	目標値 (平成21年)
農産加工に取り組む地域活動グループ数	15 団体	30 団体
農産物直売所にて売上 100 万円以上の農家数	34 戸	60 戸

まだまだ小規模ながら、農産加工に取り組む地域活動グループが育ってきており、それぞれにオリジナル商品の開発に力を入れるところも出てきた。こうした農産加工に取り組むグループの取り組みは、エコツーリズム客の拡大とともに、いわゆるコミュニティビジネスとして発展していくことが期待できる。

さらに、食品の安全性や環境汚染への懸念などにより、安心して安全な食材を求める指向が強くなっている情勢を踏まえ、環境保全型農業、無農薬野菜の栽培なども促進されていくものと考えられる。また、消費者と直接的に向き合う機会を増やす中から、農業生産、農産物加工の分野での研究開発、新技術導入といったことへの期待もできる。

これらの結果として、地域の特産品としての野菜・米等のブランド化を図りながら、直売所での直販ならびにインターネットを活用した通販、さらには物流拠点施設の活用などにより、生産者の顔が見える販売促進・販路の拡大を図り、農業の振興を図っていくことが第三の目標である。

(目標4) 研究機関の誘致

目標とする指標	現状値 (平成17年)	目標値 (平成21年)
薬草商品を取り扱う商店・事業所数	5 店	10 店
薬草に関する特産品開発の研究実績 (新たに開発された薬草商品)	12 品種	17 品種 (新規に 5 商品)

中山道・柏原宿は、伊吹山のヨモギを原料とした“もぐさ屋(お灸)”が10軒ほど軒を並べ賑わった街道であった。この伊吹もぐさに代表されるように、伊吹山は薬草の宝庫で、ここで育つ草花の数は1,250種ともいわれ、伊吹山固有の草花も少なくない。江戸時代・明治時代を通じて、多くの研究者がその植生を調べたほどであり、今でも数多くの研究者が伊吹山を訪れている。

新しい農山村の発展を展望していくにあたっては、こうした地域の資源を高

生産性・高付加価値なものとしていく努力が不可欠である。起業家的な視点や意欲を持って、世界に貢献する独創的で先端的な研究開発を進めていく拠点形成をめざすことで、将来的には、地元住民にこれまでの農山村では得られにくかった知識集約型産業の雇用機会を創出していきたいと考えている。

そこで、薬草という地域固有の資源に着目し、研究開発・人材育成の拠点形成を通じた知的資本の充実、新たな産業創出のための産学官の連携強化、新たな産業創出の土壌の定着をねらいとして、薬草に関する企業・大学の研究機関の誘致を実現することが第四の目標である。

(目標5) 美しいまちづくり

目標とする指標	現状値 (平成17年)	目標値 (平成21年)
環境リーダー人数 〔環境美化推進員の人数〕	20人	50人
地域で一斉清掃に取り組む自治会・集落数	20箇所	50箇所

米原エコミュージアムの考え方は、都市から訪れる訪問客を増やすことだけを目指すものであってはならないと考えている。

都市住民との交流は、豊かな自然環境の中で暮らす住民にとって、地域の宝を見直すきっかけとなることが期待される。

今ある美しい自然環境、田園景観、山里の風情、さらには住民の暮らしの中に息づく伝統文化・生活文化などの良さは、そこで暮らすものにとっては当たり前のものであり、看過されることも少なくない。都市住民との交流の中で、その良さを評価されるしくみをつくり、地元住民が改めて地域の宝を見直す機会を増やすことで、住民の主体的な活動意識をさらに喚起して、美しいまちづくりを推進していくことが第五の目標である。

そのことはまた、美しいまちづくりが実現されることが、エコツーリズムの舞台として活用されていくことにつながるものとなる。

5 . 目標を達成するために行う事業

5 - 1 . 全体の概要

エコミュージアムプログラムの拠点施設となるグリーンパーク山東、道の駅“伊吹の里”、醒井水の宿駅、道の駅“近江母の郷”などの拠点施設の整備充実を推進する。

これらの拠点施設と、広域交通の拠点である米原駅並びに米原ジャンクションとの交通網の充実を図るとともに自然体験や農山村体験の舞台となる当地域内の各地の拠点とを有機的に結びつける交通網の整備を推進する。これにより当地域内の地域資源や拠点施設の総合力向上を進め、機能分担や補完力を高めるとともに、地域住民の交通利便性の向上を図る。地域資源や拠点施設間を概ね 30 分以内で移動できる体系的な道路交通網の整備を目指すものである。

また、中山道、北国街道、北国脇往還といった歴史の道や、田園を通る農道、林間を通る林道などを訪問者が地域の歴史や美しい景観にふれて楽しみながら歩くことのできるウォーキングロードあるいはサイクリングロードとして整備を進める。

あわせて、住民と行政の協働により住民の創意と工夫を活かした活動を支援し、里山保全・森林保全、農地保全などの環境保全活動や歴史文化・生活文化の継承・保存活動を活発化させるとともに、自然案内人（案内ボランティア）などの人材育成、住民の手によるまつりやイベントの開催を推進していく。こうした活動と連携する形で、エコミュージアム拠点施設が中核となって、都市住民向けに地域情報を発信するとともに、優れた自然環境、農林業、歴史文化、生活文化などを素材とした都市住民向けの体験ツアー商品としての「交流・体験プログラム」の開発、農林産物を活用した商品開発・販路開拓、流通基盤の整備などの取り組みを展開する。

さらには、将来的な薬草特区の申請を視野に置き、薬草を活用した新産業の創出に向けた調査・研究活動を推進し、薬草特産品の生産、薬草関連企業・調査研究機関の誘致活動を展開していく。

5 - 2 . 法第 4 章の特別の措置を適用して行う事業

道整備交付金を活用する事業 【A3001】

対象となる事業は、以下のとおり事業開始に係る手続き等を了している。
なお、整備箇所等については、別添の整備箇所を示した図面による。

市道：道路法に規定する市町村道に認定済み

市道市場池下線（平成16年3月31日）

市道五反田役場前線（平成8年4月5日）

市道宮田米原東口線（平成13年3月9日）

市道入江磯梅ヶ原線（仮称）（平成18年3月認定予定）

林道：森林法による湖北地域森林計画（平成16年12月樹立）に路線を記載

林道上丹生柏原線

[施設の種類（事業区域）、事業主体]

- ・市道 （米原市） 米原市
- ・林道 （米原市） 滋賀県、米原市

[事業期間]

- ・市道 （平成18年度～22年度）
- ・林道 （平成18年度～21年度）

[整備量及び事業費]

- ・市道 1.450km、 林道(舗装)5.000km、 林道(開設)1.000 km
- ・総事業費 2,938,000 千円
 - 市道 2,588,000 千円（うち交付金 1,294,000 千円）
 - 林道 350,000 千円（うち交付金 175,000 千円）

5 - 3 . その他の事業（地域再生の認定に基づく支援措置）

地域再生法による特別の措置を活用するほか、以下の事業を行うものとする。

地域再生支援のための「特定地域プロジェクトチーム」の編成【C3003】

【国土交通省、総務省、財務省、農林水産省、厚生労働省、
経済産業省、環境省、内閣府】

特定地域プロジェクトチームを設置して取り組むべき課題

米原エコミュージアムの実現にあたっては、「薬草」に焦点を当て、地域の個性化を目指す考えである。

（米原エコミュージアム薬草特区の申請を視野に入れている。）

伊吹山麓は日本を代表する薬草の宝庫として有名である。その歴史は古く、

平安時代の延長5年(927年)の延喜式にすでに伊吹山が薬草を産出していたことが記録されている。現在でも、多くの本草学者や植物学者が注目している山である。

「伊吹もぐさ」に代表されるように、全国に知れ渡った薬草商品があり、中山道柏原宿には、江戸時代のたたずまいのままに今でも“もぐさ”を商う商店がある。「伊吹もぐさ」のほかにも、健康茶材、薬草入浴剤、草木染、薬膳弁当などへの活用を通じて地域住民の生活に密着している。

価値ある地域資源である「薬草」をキーワードとして、地域産業の振興を図っていくことが、米原エコミュージアムを実現する上での重要な課題となっている。

プロジェクトチーム設置の必要性

薬草活用型産業の創出または誘致、薬草による観光振興、地域農林業の振興、さらにはコミュニティビジネスの普及など、薬草の活用による地域の産業振興には大きな可能性がある。

「薬草を活用した地域産業の振興」を米原エコミュージアムの重要課題として検討するにあたっては、薬草の活用方策、薬草の商品化・事業化にあたっての課題、薬事法など法規制への対応など、専門的かつ総合的な研究が不可欠である。

このため、「薬草」と「産業振興」に関わる分野に豊富な知識を有する研究者・専門家、実務者からの指導・助言、情報提供といった支援が必要である。

取り組みを行うことで達成される成果

米原に暮らす住民が、薬草という地域資源についての理解を深めることができる。

薬草という本来人間が生きるために必要としてきた植物を健康的に使用する知恵を再確認することにつながる。

薬草をテーマとした地域コミュニティビジネスの展開を図ることができる。企業・大学の研究所等の誘致を図る目的が明確化される。

薬草による健康産業の展開を図り、米原の個性的な産業振興を図ることができる。

その他

既に、特定地域プロジェクトチームの設置を行い、米原エコミュージアムの実現に向け動き出しているところである。

現在、以下の2つの個別テーマについての検討グループを設置し、検討を進めているところである。

- 1)薬草振興グループ(薬草を活かした特産品開発など)

2)観光振興グループ(自然環境等を活かしたエコツーリズム・グリーンツーリズムの振興など)

平成17~18年度を目標に、米原エコミュージアムの実現に向けた推進計画の策定に取り組む考えであり、プロジェクトチームには、同計画策定にあたってのシンクタンク機能を期待するところである。

6. 計画期間

平成17年度~22年度

7. 目標の達成状況に係る評価に関する事項

4に示す地域再生計画の目標については、計画終了後に米原市において必要な調査を行い、状況を把握・公表するとともに、関係行政機関と地元住民代表からなる「米原市地域再生協議会」を開催し、達成状況の評価、改善すべき事項の検討等を行うこととする。

8 地域再生計画の実施に関し当該地方公共団体が必要と認める事項

8-1. 旧プログラムに基づき既に認定されている取り組み

平成16年12月に、「山東・伊吹エコミュージアムプログラム」として計画の承認を受けた際、旧プログラムに基づき認定されている取り組みは以下の通り。

(講じようとする支援措置の番号及び名称)

- ・230001 道路使用許可・道路占用許可の手続き改善
- ・212002 道路占用許可弾力化(オープンカフェ)
- ・213004 エコツーリズムに対する支援
- ・230003 バイオマスタウン構想(仮称)の実現に向けた取り組み
- ・230004 都市と農山漁村の共生・対流に関する施策の連携強化
- ・230009 良好な景観形成の推進

内容は、添付書類に示す。

8-2. その他の事項

米原エコミュージアムの実現のための施策としては、構想段階の事業も少なくないため、継続的に調査・研究活動を行いながら、プログラムの充実を図っていく。また、プログラムの実現にあたって、既存の法規制で緩和する必要があるものについては構造改革特区の申請を行う。

これまでの委員会・研究会活動等の中で、岐阜薬科大学との関係を深めてきている。今後も同大学との交流・連携を深めていくこととする。